

第十章 接 辭 論

一

助動詞は動詞の所屬活用形に膠着することによつて複合語尾を形成するための成語素である。それは語全面に對する成語素ではなく、語尾に注點を置く成語素でなければならぬ。語尾的成語素でなければならぬ。かゝる語尾的成語素としての助動詞に對して、接辭は語幹的成語素として發達したものである。助動詞を助詞と同様に考へようとする人々に對して、助動詞をかゝる接辭と同様に考へようとする人々がある。それは如何なる見解に於て同様とするのであるか餘り明瞭でないが、恐らく成語素ではなく成語素として語の一部となるといふ點にあるのではないかと思ふ。例へば「花が……」「花を……」の「が」「を」は節の形態部をなすものであるが、語の形態部をなすものではない。然るに「咲かなう」「咲いた」の「なう」「た」は、「咲く」といふ動詞の語尾に添接し「かなう」「いた」の如き複合語尾を形成することにより、それ／＼形成動詞の一部となるものである。その證據に前者の助詞に於ては、「櫻の花が……」「私の家の櫻の花が……」「公園に咲いてゐる櫻の花を……」の如き連語としても「が」とか「を」とかが依然として之を意義部的先行素とする節の形態部となつてゐるのであるが、助動詞に於てはさやうなことが絶対にあり得ない。「花が咲かない」とか「飛鳥山ではもう咲いた」などの如き連語の全面を先行素とし

て、「ない」「た」などが添接するものでは決してなく、それらは只管動詞の中に踰踏してゐるものである。かやうな考へ方で助動詞を接辭と同様なものと見て行くのは、勿論一步を進めたものといふことができる。助動詞を不活用辭・助動詞を活用辭の如く考へ、接辭の本質などには殆んど目もくれないやうよりは、慥に進歩せるものと言はなければならぬ。しかし、接辭と助動詞とは又異なるものでなければならぬ。成語素としては一應同様なものと考へなければならぬが、そこに又兩者の間に相異なるものがあるのである。勿論それは獨立的とか非獨立的かといふことではない。接辭の如きものでも何等かの意味で獨立的でなければならず、可分析的でなければならぬ。之に反して助動詞は複語尾的であり、却つて非獨立的であるとも言ふことができるのである。又規則的不規則的などといふこともその區別の標準とならぬ。助動詞の中にも不規則的なものがあり、接辭の中にも比較的規則的なものがあるのである。

接辭は助動詞と本質的に如何なる點に於て異なるのであるか。兩者は共に成語素としての文法語と見なければならぬものであるが、その間に於て如何なる點を異にするものであるか。それは前にも言つたやうに、先づ助動詞は語尾的成語素であるが、接辭は語幹的成語素であると言はなければならぬのである。語幹的成語素とは如何なる意味のことであるか。語尾的成語素は動詞語尾を複合語尾に形成することによつてその動詞を更生せしめる意味のものであるが、之はかゝる語尾よりも遙かに語の内部的構造に干與するものでなければならぬ。より成語的な成語素でなければならぬ。しかしそれは語根に觸れる如きものであつてはならぬ。語根に觸れるものは附庸的添接的な接辭などでなく、も早語根と同格的なものでなければならぬ。そこには種々の語の合成とか複合とかがあるのである。

例へば疊語とか熟語とかといふもののやうな語の根的交渉である。それは文法以前のもの、文法的介入を無視せるもの、謂はゞ孤立語的交渉である。文と文とが思想的に關係してゐる言語状態を連文と稱するのであるが、語の根的交渉は、かゝる連文關係と共に文法事實の周邊に活動する事實である。文法と文法以外のものとの推移地帯である。文法活動はかゝる兩推移地帯の中間の事實である。接辭はかゝる語根に抵觸するものではない。より成語的な成語素であるとしても、語根に干涉することによつて新語を形成する意味の成語素ではない。否、接辭といふものは語根に對しては如何ともすべからざるものでなければならぬ。

接辭は語根の附庸素添加素として語幹を形成するものでなければならぬ。語幹形成素でなければならぬ。助動詞はそれが如何に一次的なるものと雖も語尾を形成するに過ぎず、語幹に對しては如何ともすべからざるものであつた。複合語尾の形成素に過ぎなかつた。然るに接辭はかゝる語幹の形成を直接目的とする材料である。隨つて接辭は又單なる語尾を形造ることは出来ない。附隨的に語尾が成立して行くことは勿論であるが、それは接辭自身の語尾に外ならない。矢張所與的なものである。別段新しい語尾を形成して行く意味のものではない。常に語幹を工作することによつて新語を成立せしめんとするものである。かくて眞の意味での派生語といふものが成立して行く譯である。派生語といふものは、嚴密なる意味でかゝる語幹的變異による新語の生成である。しかし接辭の添加といふことは、かゝる派生語生成の有力なる一方法である。

しかし文法學上接辭を論ずるのは、已に成立せる派生語に對して分析を施し、かくて接辭の添加狀況を知り之等分類して行かうとするのではない。語として不可分的となつてゐるものを、わざ／＼外部から分析して行かうと

するものではない。これは所謂通時言語學的な仕事である。語源論や語彙論に於ける作業である。文法學で特に接辭を考察して行かうとするのは言語材料として浮動せるものに就いてである。何等そこに外部的分析を加へるやうな手順を経なくても、言語自體の力で現に分析綜合的な接辭を對象としようとするのである。接辭といふことを單に語根に附庸添着することにより語幹を形成し、かくて新語を派生するものであるとすれば、その中に通時的なものと共時的なものがあるのである。語の中に内潜沈下してしまつてゐるものと、未だ語の外周で活動してゐるものがある。例へば「赤む」から「む」を析出する如きことは、明かに後者の接辭分析である。「赤らむ」「赤さ」に至つては尙更である。然るに「赤し」の「し」を析出するには、多少手の込んだ通時的見解が必要であり、明かに前者の接辭分析となる。「明す」「明る」も略々同様である。更に右の根「あか」に「明く」といふ語を近寄せてみると「^アア」の如く分析せられ、一方「表す」「顯る」などから「現^ア」「新^ア」に至り更に「現^ア」「在^ア」（あり／＼と）などに及ぼし、之等を重加することにより、最終的語根と數個の接辭とを得るのである。しかし文法學上問題となるものは「赤む」「赤らむ」「赤さ」の如きもののみであつて、^アの如きものに就いては餘り之を問はないのである。謂はゞ共時的接辭狀態の如きものを對象として行ふのである。外的分析の手順を借りることなく、その言語自體が自律的に析出顯示してゐる接辭を問題として行ふのである。

二

接辭は語幹的成語素として成立せる特殊な文法的材料語である。それは語根乃至は語根的なものを中核とし、そ

の周邊を繞りて凝着し、語の次層的なものを形造つて行くものである。しかして只助動詞と異なり、そのより内部的な地點にまで立入り、語尾のみに止まらず語幹を形成して行くものである。かやうな接辭の中で、根に先行するものと後行するものがある。前者は接頭辭であり、後者は接尾辭である。尤も言語により挿中的と見るべきものもあるやうであるが、之もその本質をつきとめて行くと結局右兩者の何れかに屬すべきものである。しかしてその中主要なるものと言へば接頭辭よりも接尾辭である。殊に日本語の如く文法的なものの後行する言語に於て然りである。接頭辭は富士谷成章が「かざし抄」の中で説明した如く挿頭的な修飾語片に過ぎない。成語的な挿頭、或は成語的從屬語である。他の挿頭は成句的の挿頭であるが、接頭辭は成語の挿頭とも考へることができるのである。接頭辭といふのは根に先行し之を觀念的に修飾するために添加せられるものであるが、之には單に音調を加へるに過ぎないものと、或種の意義を加へるものとある。前者は古來發語などと謂はれて來たもので、種々の象徴的音節を冠することにより、名詞動詞形容詞、或は副詞などの意義を表情的に修飾せんとするもので、それらは略々次の如きものである。

「や」

名詞に添へられてゐる例

さ衣 さ夜 さ苗 さ霧 さ牡鹿

動詞に添へられてゐる例

「み」

さ渡る さ迷ふ さ走る さ躍る

名詞にのみ添へられる。

み谷 み山 み雪 み空 み坂 み崎 み吉野 み熊野

「た」

動詞に添へられてゐる例

た靡く た謀る た走る た比ぶ た依る た向く

形容詞に添へられてゐる例

た弱し た易し

副詞に添へられてゐる例

たゆた

「を」

名詞に添へられてゐる例

を田 を山田 を野 を簾 を瓶 を車 を長谷 を筑波

動詞に添へられてゐる例

を止む

形容詞に添へられてゐる例

を暗し

「け」

動詞に添へられてゐる例

け劣る

け壓さる

け嫌ふ

形容詞に添へられてゐる例

け近し

け長し

け疎し

け清し

副詞に添へられてゐる例

けざやか

けうとけ

「か」

動詞に添へられてゐる例

か寄合ふ

形容詞に添へられてゐる例

か弱し

か細し

か黒し

か易し

か青し

「が」

形容詞に添へられてゐる例

がぼそし

副詞に添へられてゐる例

が武者ら

「そ」

動詞にのみ添へられる。

そ叩く　そ知らぬ

「す」

動詞にのみ添へられる。

い渡る　い行く　い倚る

「ひ」

形容詞にのみ添へられる。

ひ弱し

何等かの意義を添へるものは、名詞數詞などの實體語に冠せられること多く、稀に動詞形容詞、或は副詞などに冠せられ、比較的明瞭な觀念内容を示すものである。

一、敬意を添へるもの

1、純國語的のもの

「おほ——お」

おほ君　おほ前　お前　お心　お顔　お年　お名前　お宮　お寺　お屋敷　お金

お米　お肴　お乳　お火鉢　お話　お願　お役　お正月　お世話　おそなへ

お氣に入り

口語では右の如く、名詞に添へられる外に數詞形容詞副詞、その他動詞の連用形に添へられる。例へば

おいくつ　おいくら　お一つ

お早い　お近い　お久しい　お美しい

おあいにく　おさつぱり　お綺麗

お出でになる。　お歸りになる。

おいでなされる。　お坐りなさい。

こゝへおいで。　こゝへお坐り。

好いやうにおし。

「み」

み位　みあかし　み堂　み言　み興

「おほみ——おほん——おん」

おほみ神　おほみ靈　おほみ心

おほん時 おほん世 おほん歌

おん心 おん衣 おん筥 おん寶

「おみ——おみお」(口語にのみ用ひる)

おみ興 おみくじ おみ足

おみ大きい

おみお膳 おみおつけ おみおなか

2、漢語的のもの

「こ——ぎよ」(御)

御用 御近所 御尊體 御旅行先 御覽 御勉強 御報告

御挨拶 御丁寧 御親切 御熱心 御賢明

御衣 御製 御意 御慶

右の中一般的に、純國語的のものは純國語的根に、漢語的なものは漢語的な根に冠せられる。
二、純正の意を添へるもの

「す」(何等扮飾するものなき意を添へる)

素顔 素肌 素面 素直

「き」(生來のまゝなる意を添へる)

生樂 生酒 生蕎麥 生眞面目

「ま」(眞正なる意を添へる)

眞心 まこと 眞晝 眞夜中

まつ白 まつすぐ まん巾 まんまる

三、初新の意を添へるもの

「はつ」(最初の意を添へる)

初春 初午 初節句 初物 初日の出

「うひ」(初めて経験する意を添へる)

うひ學び うひ孫 うひ冠 初産 うひ陣 うひ見參 うひ山ぶみ

「にひ」(新しい意を添へる)

にひ月 新田 にひ詣り

四、小なる意、或は些少の意を添へるもの

「こ」

小山 小松 小男 小一里 小百圓 小一時間

こ高い こ憎らしい こ面憎い こ躍る こましやくれる

こぎれい こざつぱり こぢんまり

五、似而非なる意を添へるもの。

「えせ」

えせ法師 えせ商人 えせ幸 えせ者 えせ笑ひ えせ歌よみ

六、否定の意を添へるもの

「ふ」

不便 不承知 不心得 不首尾

「ぶ」

無禮 無勢 無器用 無陵想 ぶ男 ぶしつけ

「む」

無利子 無欲 無分別 無藝

七、順序数なることを示すもの。

「第」

第一 第三號 第十番目 第一等

八、性を示すもの

「を・め」

牡牛 牝牛 牡鹿 牝鹿 をす めす をんどり めんどり

雄松 雌松 雄蕊 雌蕊 をねぢ めねぢ をかぎ めかぎ

以上の如き接頭辭に比し、接尾辭は文法上より重要なものと言はなければならぬ。それは一般的に言つて、根に後行することにより語の形態部を形成する要素であるからである。しかし接尾辭の中にも直接的には單に意義的必要からのみ添加せられるに過ぎないやうなものもあるのである。勿論それらは根に後行する關係上、形成せられた語の文法的責任の一切を引受ける部分となるのであるが、かやうなことよりもそれらの接辭にとつては根を意義的に裝定することが肝要なのである。かゝる裝定的接尾辭とも言ふべきものに、敬讓尊卑に關するものと數量に關するものと二種類がある。先づ前者は略々次の如きものである。

一、尊敬の意を添へるもの。

「さま」

神様 佛様 王様 人さま あなたさま お子様 奥様 御叔母上様
口語ではこの「さま」が副詞に添へられることがある。

お生憎さま いかさま いかゞさま

「さん」

おとうさん お嬢さん 太郎さん お前さん 高山さん

「どの」

大佐殿 お松どの

「どん」

西郷どん 小僧どん お竹どん

「くん」

田中君 次郎君

二、卑下又は輕侮の意を添へるもの。

「め」

太郎め 小僧め 弱虫め 馬鹿め

以上の外に「がた」「たち」「ども」「ら」「ばら」の如き數量に關するものにも稱格的區別があるが、之等に就いては次に掲げる。さて數量に關するものは略々次の如きものである。

一、多數の意を添へるもの。

1、人に限らず一般事物にも用ひるもの。

「ら」（概示するもの）

少女ら 清盛ら 柊木ら 吾等 それら これら

場所方向の代名詞に添へるときは多數といふより場所方向を廣く概示する。

「ども」（例示するもの）

私ども 親ども 木ども 車ども

右の「ら」「ども」は人的なものに用ひられる場合は卑下又は輕侮的となる。
2、人的なものに限つて用ひられるもの。

「がた」(敬意を表す)

宮方 皇族方 殿方 御婦人方 あなたがた 皆様がた

「たち」(「がた」よりも多少程度が低い)

大臣達 親達 君達 おまへさん達

「ばら」(寧ろ卑める意を表す)

殿原 奴原 法師ばら 雑人ばら

二、順序數なる意を添へるもの。

「め」

一つ目 二度目 五年目 三週間目 幾杯目 十人目 三番目 三號目

「等」

六等 幾等 何等

「番」

一番 幾番 何番

「號」

四號 何號

三、單位を示すもの。

「つ」（個數を示す）

ひとつ ふたつ ことのつ いくつ

「ち」（十單位を示す）

はたち みそち いくそち ちち

「り——たり」（人數を示す）

ひとり ふたり みたり よたり

いつたり なゝたり やたり ことのたり

「か」（日數を示す）

ふつか みか よか いつか やうか ことのか とをか はつか みそか もゝか

以上の外に人、羽、匹、頭、冊、本、枚、個、圓、錢、尺、寸、貫、匁、升、合等種々ある。

接尾辭の本領は、それが根に後行することによつて語の形態を種々に形成して行くところにあるのであるが、右に挙げた裝定的接尾辭の如く、かゝる本領的なものを直接目的とせず、接尾辭として寧ろ偶然的なものであるべき意義的裝定の爲に成立してゐるものもある。しかし、それらと雖も、形成語の文法的責任を一切引受ける部分となるのであるから、常に然るべき形態の語片でなければならぬ。實體語を形成するものならば、その接尾辭も實體語と

しての文法的責任を引受け得る如きものでなければならぬ。とは言へ、装定的接尾辭は根の機能に何等變更を加へるものではない。名詞に添加されば名詞、數詞に添加されば數詞を形成するといふやうに行はれるものであつて、そこに何等かの機能範疇的變換を要求する如き、文法的に強力な接尾辭ではないのである。然るに次に掲げる如き眞に語の形態を形成する接尾辭は、之を添加することにより根に新たな文法的機能を加へ、或はその機能範疇を變換せしめ、かくすることによつて新語を派生せしめんとするものである。故に之を文法的接尾辭と稱してもよいと思ふ。しかしてかゝる文法的接尾辭には、名詞を形成するもの動詞を形成するもの形容詞を形成するもの副詞を形成するもの等種々のものがある。先づ名詞を形成する接尾辭には次の如きものがある。

「み」

形容詞の語幹を根とし、その性狀の存在する度合を表す名詞を成立せしめる。

高み 重み 強み 厚み 痛み 甘み 赤み 青み 黒み 白み 凄み

この「み」は本來から言ふと

芳野の宮は山高み雲ぞたなびく。

玉にぬく五月を近みあえぬがに花咲きにけり。

村肝の心を痛み鷄子烏うら歎け居れば。

のやうに、形容詞語幹に動詞的述素^mを膠着せしめたものの連用形で、その性狀が益々深みへ進行しつゝある現實を意味するものであつたが、その居體言的用法が特立的に發達するに至つたもの。しかも之は、志久活

にはなく久活にのみあることに注意しなければならぬ。

「さ」

形容詞の語幹又は副詞を根とする場合は、「み」の如くその性狀の存在する程度を表す名詞を成立せしめる。但し「み」は内向的であるが之は外比的である。

遠さ 大いさ 善さ あしさ 薄さ 面白さ 長さ 白さ 甘さ 痛さ

苦しさ 悲しさ 淋しさ 戀しさ 懷しさ 美しさ めざましさ

静かさ 静けさ あはれさ 愉快さ 綺麗さ 大膽さ

又、動詞の終止形を根とすれば、その動作の行はれる場合を示すものとなる。

逢ふさ 離るさ 行くさ 來さ かへるさ

「け」

形容詞の語幹を根とし、その性狀の顯現しつゝあることを表す名詞を成立せしめる。

寒け 眠け おちけ

「げ」

名詞を根とする。氣の連濁である。

大人げ 雪げ

次に之に關聯して代名詞を特殊化するものを掲げておく。

取られさう 泣きたさう 大切さう にぎやかさう あはれさう

しかし形容詞語幹が一音である場合は間に「さ」を挿入する。

よささう なささう

この「さう」は大體「げ」と同様な意味を表し口語に用ひられるものである。

「てき」

漢語の名詞又は副詞を根とする。

理論的 實際的 積極的 消極的

自然的 人文的 物質的 精神的 物的 心的

以上は總て不活用的なものを形成する接尾辭であつて、接尾辭としての機能が未だ明瞭ではないが、動詞形容詞等の活用語を形成する接尾辭はその機能を最もよく發揮してゐるものと言ふべく、實に接尾辭中の接尾辭である。その中、動詞を形成する接尾辭は大略次の如きものである。

一、四段系の活用を有するもの。

「めく」

名詞を根とし、その性状の次第に顯現して行くことを表す動詞を成立せしめる。

時めく 春めく 唐めく 人めく 上手めく 婀娜めく

「めかす」

上の「めく」を左行四段に轉じ作意的にしたものである。根は勿論「めく」と同様である。

時めかす　　今めかす　　我物めかす

「だつ」

名詞を根とし、積極的にその性狀となることを表す動詞を形成する。

おもだつ　　氣色だつ　　頭だつ

「ばむ」

名詞、動詞連用形などを根とし、その性狀の少しく顯現することを表す動詞を形成する。

氣色ばむ　　黄ばむ　　枯ばむ　　由ばむ

「なふ」

名詞、副詞等を根とし、然することを表す動詞を形成する。

音なふ　　商なふ　　うべなふ　　罪なふ　　あがなふ

つぐなふ　　おぎなふ　　やしなふ

「がる」

名詞、形容詞語幹、副詞などを根とし、自然然思ふことを表す動詞を形成する。

親がる　　通人がる　　才子がる　　面白がる　　寒がる　　痛がる

嬉しがる　　をかしがる　　淋しがる　　得意がる　　億劫がる

あはれがる いやがる

「ぶる」

名詞、副詞などを根とし、故意に然することを表す動詞を形成する。

才子ぶる 學者ぶる 賢人ぶる 勿體ぶる 上品ぶる 利巧ぶる

「む」

形容詞語幹又はそれに接辭「ら」を添へたものを根とし、その性狀が深まつて行くことを表す動詞を形成する。

赤む 白む 黒む 深む 弱む 赤らむ 薄らむ

二、一段系の活用を有するもの（文語上二段、口語上一段）

「ぶ——びる」

名詞、形容詞語幹、副詞などを根とし、その性狀を發揮することを表す動詞とする。

大人ぶ（びる） 都ぶ 鄙ぶ 翁ぶ うつくしぶ よのつねぶ ことさらぶ

「さぶ——さびる」

名詞、動詞の連用形などを根とし、意味は「ぶ」と略々同様であるが多少強力である。

神さぶ（びる） 山さぶ 翁さぶ 乙女さぶ 繁みさぶ 勝ちさぶ

「じみる」

名詞を根とし、實際その様子であることを表す動詞を形成する。

氣違じみる 年寄じみる

「む——める」

四段系の「む」の他動的なものである。

赤める 赤らめる 深める はづかしめる。

次に形容詞を形成する接尾辭は略々次の如きものである。

一、久活系のもの。

「けし」

副詞を形成する接尾辭「か」をつけ得る根、或は名詞をも根とする。

のどけし しづけし はるけし あきらけし たひらけし 露けし

二、志久活系のもの。

「らし——らしし」

一般に名詞を根とするものであるが、口語では外に副詞、更に副詞に助詞「と」の添へられたまゝのものを根とする。

男らしし 子供らしし ことさららしし 本當らしし わざとらしし

「がまし——がましし」

名詞、動詞連用形、副詞などを根とする。

人がまし 議論がまし(がましい) 追従がまし 恥がまし 指圖がまし

隔てがまし 勝手がまし 奢りがまし をこがまし

「がはし——がはし」

動詞連用形を根とする。

みだりがはし

「めかし——めかし」

名詞を根とする。

今めかし 古めかし 生めかし 商人めかし

三

以上接辭と目せられるものの主なるものを擧げてみたのであるが、その模式的なものは動詞とか形容詞などといふ活用形態を有する陳述語形成の接尾辭である。之等は既成的なものを根とし之に膠着することによつて語幹を再造し、而してそれに附隨して語尾の新たな變化相をも現出せしめるものである。しかし名詞とか副詞とかといふ不活用語を形成する接尾辭も、それが膠着することによつて根とせられたものの文法機能を變換するものであるから、形態的にはさまで顯著なものではないが、文法的接尾辭としては極めて重要なものと言はなければならぬ。接尾辭

一般は常に文法的接尾辭の性格を有するものでなければならぬ。随つて同じく接尾辭の中でも意義的裝定を目的とするものは二義的な接尾辭である。しかしそれらと雖も、稱格とか數量とかといふ文法上可成重要な事柄に關するものであるから忽略に附してはならぬのである。かゝる接尾辭に對する接頭辭は文法上比較的輕い意味のものである。接辭としての本質は接尾辭的でなければならぬ。殊に日本語の如き構造的言語にあつてはその傾向が強い。

接頭辭は、接尾辭的なものの語根を突破する尖端の如きものとも考へられる。しかし接頭辭の中でも意義裝定のもの、特に稱格に關係あるものは文法學上輕視することができない。インドネジャなどに存する挿中辭は日本語にはないが、之等は何等かの意味に於て接頭或は接尾の中に編入さるべきものである。

接尾辭の内容は大略以上の如きものであるが、之等は文法的構造の上に於て如何なる地位を占むるものであるか。それは勿論成語素として語幹形成的のものであるが、かやうなことを文法的構造の全體相から今一度考へ直し、接辭の性格を一層明瞭にして置きたい。一體、文法的構造とは如何なるものであるか。それは一般的には節の形態部の構造である。節といふのは言語の斷續的接踵に於て文を成し句を形造る要素であるが、かゝる節には常に語彙面と文法面とがある。前者は恣意的非配意的であるが後者は合法的配意的である。斯くて語彙面に於て意義部が成立し、文法面に於て形態部が成立してゐるのである。しかして形態部の機構は單複さまぐである。殆んどゼロ形態的とも言ふべきものから表情の委曲を盡したものに至るまで種々雜多である。かゝる形態部の機構が即ち文法的構造に外ならぬ。之に對する觀念的構造は節相互の關係狀態であるが、文法的構造は節の内部に於ける文法素の連接關係である。正しくは節の後行部に於ける形成機構である。之に對する節の先行部に於ける形成機構は如何なるも

のであるか。それは意義部的機構であるが、それには單語と複語とが考へられる。複語には疊語とか熟語などの如き合成語と連語とがある。合成語は嚮にも一言した如く、語根的相關であるが、連語は文法介入の複語である。連語は文法介入によるものであるといふことは如何なることであるか。それは勿論「たけのこ(筍)」「きのこ(茸)」「えのき(榎)」「きのえ(甲)」「ほのほ(焰)」「やなぎ、柳)」「やつこ(奴)」「たなごゝろ(掌)」「けだもの(獸)」の如く文法的介入が語中に内潜し單一語として凝縮されてゐるものを言ふのではない。矢張、修飾關係とか補充關係とか統合關係とか、或は並列關係とかといふ種々の觀念的構造により成立せるものでなければならぬ。然らばそれと句とが如何なる點に於て異なるのであるか。こゝに至ると全く立場觀點の相異であると言ふより外はない。實質的には連語も句も殆んど相異がないのである。連語は所與的材料として見たものであり、句は結果的形成的として見たものである。かやうな連語と句とを區別して立てなければならぬ根據は言語相關の立體性にあるのであるが、今は之を詳論することを止めて、次に單語には所與的なものと形成的のものとなる。前者は眞の意味での單一語であり、後者は接辭添加によるものである。凡そ以上四つのものが節の先行的機構を成すものであるが、その中接辭添加による形成單語は、半ば先行部的であり半ば後行部的であると言はなければならぬのである。恰も連語が立場觀點の相異を外にしては實質的には句と相重なるべきものであると同様に、接辭の添加は節機構の先行部と後行部との重なり合ふところである。意義部と文法部との推移地帯である。故に接辭は文法的構造の最も内部的なもので、随つて又最も語彙的なものであると言ふことができる。

かやうな接辭に對して、助動詞は語尾形成素として常にその外周に位置すべきものである。助動詞は接辭に後行

すべき成語素でなければならぬ。かゝる成語素に對して成節素は更にその外周に位置すべきものである。活用は接尾辭や助動詞の形態的變化現象であり、而して助詞は更にその活用に添加されて行くのである。故に活用を一次的成節素とすれば、助詞は二次的成節素でなければならぬ。しかしてその助詞の中にも一次的なものと二次的なものがある。かく文法的構造は次第に内から外へ向かつて連接して行くものである。意義的構造により近いものから始まり次第により遠いものへと後行的に連結せられて行くものである。勿論それらの中には單複さま／＼のものがあるのであるが、ともかく一般にかやうなことが言ひ得るのである。翻つて意義部の構造に於ては、接辭添加による形成單語は最も文法的なものとして後行的性格を有するものと言はなければならぬ。かくて所與的單語、合成語、而して連語といふやうに考へて行かなければならぬ。連語は殆んど句とその内實が合致し、意義部としての構造性すら稀薄となつてゐるのである。ゼロ形態的なものを形態部の極限とすれば、連語は意義部の極限と見てよい。かやうに考へて行くと、接辭添加といふことは實に節の中心軸を成すものといふことができるのである。それは語彙面と文法面とが接觸するところであり、言語活動の廻轉軸である。

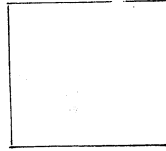
接辭が節の中心軸を成し言語活動の廻轉軸であるといふのは如何なることであるか。それは勿論文法的接尾辭の如きものを主として考へることになるのであるが、かやうなものは從來考へられてゐたよりも今少しく深い意味のものでなければならぬのである。接辭は語幹的形成素であるといふが、語幹といふのは語の如何なる部分であるか。それは節の中心軸であると共に語の意義部と形態部とが統一せられるところでなければならぬ。語幹は意義部でもあり又形態部でもある。この意味から單なる意義部にしか關與しない接頭辭などは、接辭としては第二義的なもの

のに過ぎないのである。眞の接辭的なものの尖端でしかない。語幹が語の意義部と形態部との統一であるといふことは如何なることであるか。一體文法上、意義部と形態部とを統一するものは何であつたか。或はそれは語そのものであるともいふであらう。しかし語は單に意義部と形態部とから成立してゐるだけであつて、語そのものには直接に意義部と形態部とを統一する力はないのである。語は成因ではなく成果に過ぎない。然らば何であるか。それは語を超えたものでなければならぬ。語を超え寧ろ語を抱擁するものでなければならぬ。こゝに於て機能範疇といふ如きものを考へるより外はないのである。機能範疇はあらゆる語彙的なものを統括し、且形態を分出せしめる文法學上の最高事實である。しかしかやうなものが個々の語に如何にして寓在し得るのであるか。語を超え語を抱擁するものが、個々の語の中に於て如何にして認めることができるのであるか。それは嚮に論じた如く、範疇的映像としての認識し得る非實質的實體である。しかし單に非實質的なものも早何物でもない。抽象的觀念の如きものに過ぎない。それが實體として存在するといふ以上、何等かの意味に於て實質的でなければならぬ。殊に言語學的實體は何處までも記號的でなければならぬ。能記と所記との聯合物でなければならぬ。かゝる範疇的映像の能記物を何に求めたらよいであらうか。私は之を語幹に求むべきものであると考へるのである。語根は廣い意味での名の如きものに過ぎず、語尾は文法機能の表示的部分に過ぎない。語が眞に文法機能を發出するところは語幹を描いて外にはない。語幹は機能範疇の能記物であり、範疇映像の象徴である。かやうな意味に於て、語幹は語の意義部と形態部との統一者である。機能範疇の能記として語幹は語の樞要部であるのである。

こゝに於てかゝる語幹的形成素としての接辭、殊に文法的接尾辭の意義は文法學上極めて重要なものと考へなけ

ればならぬのである。接辭添加といふことは、單に語を扮飾したり派生せしめたりするといふ意味のものではなく、一面に於て語の機能範疇を決定して行くことでなければならぬ。語を文法言語として創造して行く意味のものと考へなければならぬ。故に接辭語片は文法的語辭のエキスであるとも考へることができるのである。何等語彙的なものに類はされない、文法範疇の具體物であるとも考へることができるのである。随つてかゝる接辭を仔細に研究し彙類してみることが、やがて機能範疇の素描を作ることにもなるのである。殊に文法的接尾辭に就いて今少しく眞摯な研究を進めれば或は現在行はれてゐる品詞理論に對し有力な資料を提供し得るかも知れぬ。

昭和十六年九月廿二日 印
昭和十六年九月廿七日 發行



日本語の構造

● 定價 五圓八拾錢

著者 堀^{ほり} 重^{しげ} 彰^{あき}

發行者 吉村 清

東京市麴町區九段一丁目十六番地

印刷者 大貫 善次郎

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

東京市麴町區九段一丁目十六番地

發行所 株式會社 畝 房

電話九段(33)四九七二番
振替東京一六六六四六番

文學博士 山田孝雄著

平田胤篤

B 6 判上製函入一三〇頁
定價一圓五十錢送料十五錢

今年篤胤先生の百年祭を迎ふるに當つて、その刻苦の生涯と翁の學の精神とを極めて簡明、且つ平易に説かれたる名著。

文學博士 山田孝雄著

連歌青葉集

B 6 判横和綴三三〇頁
定價三圓送料十五錢

短詩形文學の源泉とも謂ふべき連歌が、明治以來久しく跡を絶つてゐるのを遺憾として其復興を圖るべく催された詠草集。

國民精神文化研究所員 三宅清著

荷田春滿

A 5 判上製函入六二六頁
定價六圓五十錢送料二十錢

春滿こそは國學の四大人の最初の祖とも云ふべき人、本書は從來兎角不備の點多かつた春滿學を詳解せる貴重な文献。

文學博士 清原貞雄著

國學發達史

A 5 判上製函入四二〇頁
定價四圓五十錢送料二十錢

本書は純正日本精神の神髓を詳さに國學發達の跡に求め、大人初めその他門流の諸説と業績を比較討究せる勞作。

株式會社

敵 傍 書 房

東京・麹町・九段下 振替東京 166646

文學博士 辻 善之助 先生 校 閱
叢 書 學 史 傍 畝

鎌倉	上代	座	中世	戰國	鎌倉	禪宗	切支	眞宗	上代	皇室	寺領	中世	〔日本出版文化協會推薦〕
佛敎	學制	の	灌漑	時代	幕府訴訟制度	の	丹史	教團	佛敎	御經濟史	莊園	の	〔日本出版文化協會推薦〕
の	の	研	史の	の	の	地方	の	開	思想	の	の	と	藝術
研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究	研究
川崎	桃裕	豊田	寶月	新城	佐藤	鈴木	海老澤	笠原	家永	奥野	竹内	森末	森末
庸之	裕行	武著	圭吾著	常三著	進一著	泰山著	有道著	一男著	三郎著	高廣謹著	理三著	義彰著	義彰著
著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著
近	近	近	近	近	近	五〇三	四〇二	四〇二	五〇三	六〇三	六〇三	五〇三	五〇三
刊	刊	刊	刊	刊	刊	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇

日本精神

國學院大學長
文學博士

河野省三 著

三・六〇

民族宗教の研究

文學博士

宇野圓空 著
棚瀬襄爾 著

六・二〇

轉換期の神道

溝口駒造 著

四・八〇

轉換期の佛教

文學博士

宇野圓空 著
永井哲二 著

三・五〇

轉換期の基督教

立教大學教授

菅圓吉 著

四・二〇

思想戰

吉田三郎 著

二・五〇

なるほどの哲學

文學博士

紀平正美 著

二・二〇

浮世繪師歌川列傳

飯島虛心 著

文庫 藤縣靜也 序
玉林晴朗 校訂

二・一四

印度美術の

主調と表現

岡本貫瑩 著

三・二〇

刊 房 書 傍 畝

禮の意義と構造
 日本語の構造
 日本文法機構論
 論語の思想
 古代詩歌に於ける
 神の概念
 神樂歌研究
 和歌秘傳鈔
 國學發達史
 風雅の誠

文學博士

西晉一郎 共著
 小糸夏次郎

〒四・二五二

文學博士

山田孝雄 著
 堀重彰

〒五・二八二

文學博士

山田孝雄 著
 堀重彰

〒三・一八四

文學博士

飯島忠夫 著
 渡部信治郎

〒三・二五二

文學博士

久松潜一 共著
 志田延義

〒三・二五二

文學博士
 國大教授

折口信夫 著
 西角井正慶

〒二・二五二

文學博士

飯田季治 著

〒二・二五二

文學博士

清原貞雄 著

〒四・二五二

各務虎雄 著

〒一・一八四

廠 傍 書 房 刊

飯田武郷著 — 内容見本送呈 —

菊判上製各册約千頁
全卷揃頒價八十五圓

日本書紀通釋

全六册揃

書紀通釋中第一等の書

東大教授 文學博士 平 泉 澄

日本書紀は國史の根本として、我が國に於ける最も重要な書物である。天地開闢の古傳、國家草創の由來は、この書によつて素直に示され、國體の特性・皇室の尊嚴はこの書によつて確實に知られるのである。これ實は日本精神闡明の秘鍵、日本人必讀の書と云はねばならぬ。

本書の註釋書としては、奈良時代から平安時代へかけての私記の諸本、鎌倉時代から徳川末期にかけて十指に餘る諸名家の註釋書が作られてゐるが、明治に入つて完成した飯田武郷の日本書紀通釋こそは、今日までのところ最もよく纏つたものとして、第一に指を屈すべき良書ある。故にこの通釋は、一般研究家に最も重用せられ参考とせられてゐる。(日本書紀解題より)